



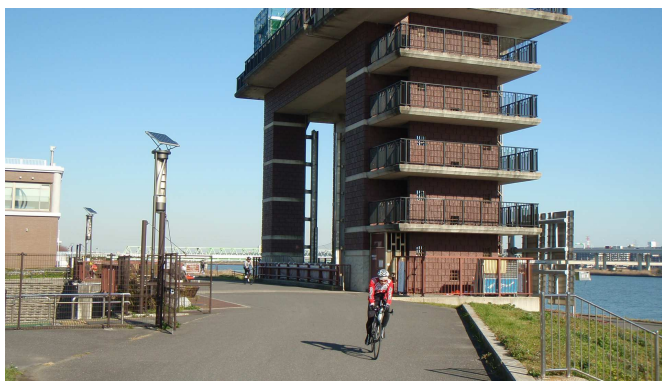
ハンゲショウ(半夏生・半化粧)

「ハンゲショウ」といえば、どこにでもありそうなドクダミ科の草。夏になると葉の一部が白くなるので「半化粧」と書く場合もありますが、一般的には「半夏生」(はんげしょう)という字が充てられます。この草は、猿江恩賜公園の隅っこで偶然に見つけました。病気で葉が白くなっていると思ったら大間違い、図鑑で詳しく調べてみれば、生育に適した土地が減少し、どちらかと云えば貴重な部類の草らしいです。

今日は夏至、2016年6月21日です。太陽に向いた地球の軸が再び遠ざかって行く運命的な日なのですが、これを祝日にしないのは納得がいきません。この日からおよそ11日目は、二十四節気を補完する雑節で「半夏生」(はんげしょう)と云うようです。この「半夏」とはサトイモ科ハンゲ属のこと。ハンゲ属を代表するカラスビシャク(烏柄杓)が生える頃と云う意味なのですが、厳密には[太陽黄経](#)が100度となる日で、今年は7月1日に当たります。

植物の方の「ハンゲショウ」ですが、見つけた所は毛利小学校の子供達が管理しているミニ水田の横、暦日の「半夏生」までには田植えを終える習わしがありますが、田植えは既に済ませてあり[野鴨\(のがも\)の夫婦が除草作業](#)の最中でした。そしてこの日は農作業の労をねぎらって、関西では蛸を、香川ではうどんを食べる風習があるようです。

ここへ来て気になりだしたのが、暦日の「半夏生」の元となったハンゲ属の[カラスビシャク\(烏柄杓\)](#)。蛇が鎌首を持ち上げ舌を出しているような形の草ですが、その根(球茎)は吐き気を鎮(しず)める優れた漢方薬のようでした。今日は天気が良いので荒川の土手まで出掛けていって、カラスビシャク(烏柄杓)を探してみようと思います。

[荒川ロックゲートとスーパー堤防](#)

向かったのは荒川と旧中川を結ぶ[「荒川ロックゲート」](#)。この付近の土手は100年から200年に一度の大洪水を想定した[スーパー堤防](#)になっていて、なだらかな傾斜の草原が広がります。

そして荒川ロックゲートは、災害時の船便による救援物資輸送のために作られた閘門(こうもん)で、不定期ではありますが、東京水辺ラインの水上バスが15時半から16時頃に通行するという噂です。

結局、カラスビシャクは見つかりませんでした。川原でピンクの可愛い花を咲かせていたのは[「ネジバナ」\(掬花\)](#)でした。花がねじれて咲くこと自体不思議なのですが、ねじれる方向が右巻き左巻き両方あるのには、さらに興味をそそります。英名は"Lady's tresses"で、まさに、亜麻色(あまいろ)の乙女の巻き毛を彷彿させてくれました。

[「ネジバナ」\(掬花\)](#)

「亜麻色の髪の乙女」と聞いてドビュッシーの柔らかなピアノの音色が頭に浮かんだ人は知識豊かな文化人、ビレッジ・シンガーズを思い出した人は相当歳を重ねたおじさんで、島谷ひとみのカバー曲なら知っているとうそぶく程度が若者と話すには適当だろうと思います。